

# もう一枚の卒業写真

おかもところおいち

ケヤキ並木のゆるやかな坂道を、しんちゃんとお母さんが、朝の散歩をしていました。

しんちゃんが、拾った枯れ枝でケヤキを一本一本たたきながら歩いていると、お母さんが突然、しんちゃんの顔をのぞきこみながら、

「ひばり小学校の二組のみんなも卒業やね」と言いました。

「そらそうや、ボクが卒業やねんから」

小学校六年生のしんちゃんは、去年九月におとうさんの転勤で引越しをし、さつき小学校に転校してきました。あともう少しでひばり小学校を卒業というときでしたから、転校の話が聞かされたしんちゃんは、「いやや」と大声を出して泣いたものでした。

転校してすでに半年が過ぎ、さつき小学校にもなれ、新しいともだちもできましたが、しんちゃんはいまでも、ひばり小学校のことを思い出すときがあります。なかでも、しんちゃんが思い出すのは、楽しかった思い出ではなく、どちらかという忘れてしまいたい思い出でした。それは、夏休みも終わった二学期のある日、算数の授業でのことでした。

いつもは算数の苦手なしんちゃんでしたが、その日、担任の清水先生が黒板に書いた問題は、夏休みの宿題にもなっていた、一度やったことのある問題でしたから、しんちゃんにもすらすら解くことができました。

「さあ、できた人」と清水先生が声をかけたとき、真っ先に手をあげたしんちゃんに、まわりのみんなからいっせいに「おー」と声があがりました。

「じゃ、しんちゃん、前に出てやってみて」そう言われたしんちゃんは黒板の前に進み、書きやすそうな長めの白いチョークを持って問題をとき始めました。教室のあちこちから、「あいつ算数苦手とちゃうんか」とか、「ぜったいまちがいよるでえ」とひそひそ声が聞こえてきましたが、しんちゃんには聞こえません。計算問題の最後の答えを書き終えると、しんちゃんは鼻から大きく息をはいて、黒板を見つめています。横でその様子を見ていた清水先生は、かっかっとう教壇を踏んでしんちゃんの答えの前に立つと、赤いチョークを持って、大きな丸をひとつ書きました。

教室のみんなから、「うおー」と大歓声がわきあがったときです。しんちゃんは、自分の顔が熱くなるのを感じました。算数ではじめてみんなの前でといた問題。その答えに大きな丸をもらったこと、予想外にみんなからほめられてうれしかったというより、すこしはずかしかったこと。いろんな気持ちが一度にこみ上げてきて、しんちゃんは、ガッツポーズをとるつもりでふりあげた、右手に持ったチョークを自分の書いた黒板の答えに投げつけてしまいました。

『バキン』と音が鳴り、チョークは黒板に白いキズを残し、二つ割れて床にころがりました。騒いでいた全員が息をのみ、教室は窓から入ってくる小鳥の声だけになりました。

しんちゃんは、いま自分がしたことに自分でおどろいていました。そしてものすごい勢いで反省していました。さっきふりあげたチョークで、先生のくれた大きな丸の横に、はなまるを書くことだって、今なら思いつくのに。そうしていたら、清水先生も今みたいに困ったような顔をせずすんだのにと。

自分でしたことをどう説明していいのか、どうしたらわかってもらえるのか思いつかないでい

ると、授業の終わりを知らせるチャイムが鳴りました。清水先生はくるりと黒板に向き直ると、しんちゃんが書いた答えとその上の大きな丸を黒板消しで静かに消しました。

そんなことがあった九月、しんちゃんは清水先生やみんなに「ごめんなさい」と言えないまま、ひばり小学校を転校したのでした。

草木の芽吹きにも早い三月、さつき小学校の卒業式が終わって、一週間ほど過ぎたある日、しんちゃんに一つの小包が届きました。それは、お母さんがしょうたくんのお母さんに頼んでおいた、ひばり小学校の卒業アルバムでした。

「うわー校舎なつかしー」としんちゃんはアルバムをめくり始めました。お母さんは同封されていたしょうたくんのお母さんの手紙を読み始めました。そこには、こんなことが書かれていました。

「しんちゃん卒業おめでとう。卒業式の日清水先生が黒板に書いたみんなへのメッセージを写真にとりました。しんちゃんにも見てもらおうと思ってアルバムといっしょに入れてあります。卒業アルバムにも入らなかった、ひばり小学校のほやほやの写真です。大事にしてね」

お母さんがそっと手渡してくれた写真を見ると、そこには清水先生の字で、「卒業おめでとう！大空へはばたけ、三十二羽＋一羽（しんちゃん）」と書かれていました。